

大杉栄 年譜

大沢正道編

- 一八八五(明治十八年)年
一月十七日、香川県丸亀に生まれる。父東(陸軍少尉)、母豊の長男として。
一八八九(明治二十二年)年 四歳
四月、東京麹町富士見小学校付属幼稚園入園。十二月、父東の転任で、新潟県新発田へ。
一八九一(明治二十四年)年 六歳
四月、新発田の本村尋常小学校入学。
一八九四(明治二十七年)年 九歳
八月、日清戦争起。父東出征。
一八九五(明治二十八年)年 十歳
四月、新発田の高等小学校へ。
一八九七(明治三十年)年 十二歳
四月、新発田中学校入学。性に目覚める。
一八九八(明治三十一年)年 十三歳
春、名古屋陸軍幼年学校に受験したが落第。
一八九九(明治三十二年)年 十四歳
四月、二度目の受験で合格、名古屋陸軍幼年学校第三期生として入学。
一九〇一(明治三十四年)年 十六歳
四月、男色事件発覚後禁足処分。ノイローゼに、十一月学友と決闘重傷し、退校処分。
一九〇二(明治三十五年)年 十七歳
新発田に帰り、一月に上京。東京学院中学校五年級受験科に通学。六月、母豊死す。
一九〇三(明治三十六年)年 十八歳
九月、外国語学校仏語科入学。十二月頃、平民社を訪ね、社会運動に近づく。
一九〇四(明治三十七年)年 十九歳
二月、日露戦争起、父東出征。七月、週刊『平民新聞』に「名古屋より」が初めて載る。
一九〇五(明治三十八年)年 二十歳
七月、外国語学校仏語科を卒業、年上の女と同棲。父東再婚、十月、平民社解散す。
一九〇六(明治三十九年)年 二十一歳
二月結党の日本社会党に参加、三月、東京市の電車賃値上げ反対運動に立ち、兇徒嘯聚罪容疑で市ヶ谷東京監獄初入獄、六月、保釈。九月、強引に堀保子(堺利彦の義妹)と結婚。市ヶ谷町田に住む。日本エスベラント協会創立援助、日本最初のエスベラント学校を開く。「新兵諸君に与ふ」(「光」)が新聞紙条例違反。
一九〇七(明治四十年)年 二十二歳
二月、「欧州社会運動の大勢」(「日刊」『平民新聞』)発表、直接行動派の名乗り、幸徳秋水側面支援。三月、「青年に訴ふ」(「日刊」『平民新聞』)新聞紙条例違反で起訴、軽禁固一ヵ月半の判決。五月、巢鴨監獄入獄。六月、「新兵」に軽禁固四ヵ月、罰金五十円の判決、十一月、出獄。
一九〇八(明治四十一年)年 二十三歳

- 一月、金曜会屋上演説事件で逮捕、治安警察法違反で軽禁固一ヵ月半の判決、巢鴨監獄。三月、出獄。六月、荒畑寒村らと赤旗事件謀る。赤旗事件につき、官吏抗拒罪、治安警察法違反で重禁固二年六ヵ月、罰金二十五円の判決。九月、東京監獄より千葉監獄へ。
一九〇九(明治四十二年)年 二十四歳
十一月、父東死す。
一九一〇(明治四十三年)年 二十五歳
十一月、千葉監獄より出獄、大久保百人町に住む。堺利彦の売文社に参加。
一九一二(明治四十五・大正元)年 二十七歳
文芸思想誌『近代思想』(月刊)を創刊。
一九一三(大正二)年 二十八歳
一月より「近代思想社小集」開く。七月より「センジカリスム研究会」を始める。
一九一四(大正三)年 二十九歳
二月、肺結核療養のため鎌倉坂ノ下へ転地。九月、「近代思想」を廃刊。伊藤野枝と知合。十月、月刊『平民新聞』を創刊、全て発禁に。
一九一五(大正四)年 三十歳
二月、「センジカリスム研究会」『平民講演会』に脱皮。三月、『平民新聞』六号で廃刊。十月、「近代思想」(月刊)を復刊。十二月頃、神近市子と結ばれる。
一九一六(大正五年)年 三十一歳
一月、「近代思想」相次ぐ発禁で潰れる。
二月、伊藤野枝とも結ばれる。四月、伊藤野枝転り込む。同志、友人と四面楚歌となる。ジャーナリズムから袋叩き。十一月、葉山日蔭の茶屋で神近市子に刺される。
一九一七(大正六年)年 三十二歳
一月、堀保子が離別を『新社会』に広告。三月、神近市子に徴役四年の判決。九月、長女魔子生まれる。十二月、どん底時代、経済的、思想的理由から亀戸(労働者町)に移る。
一九一八(大正七年)年 三十三歳
一月、野枝と共に『文明批評』創刊。四月、『文明批評』三号で廃刊し、『労働新聞』を創刊、労働運動へ。徹底的弾圧で『労働新聞』
一九一九(大正八年)年 三十四歳
三月、革命的労働運動家の集団「北風会」を結成、アナキズム、サンジカリスムの新しい拠点に。七月、五月の尾行巡查殴打事件で起訴され、懲役三ヵ月の判決。十月、野枝、和田久太郎、近藤憲二らと『労働運動』(月刊)を創刊、白紙主義を掲げる。十二月、豊多摩監獄に入獄、次女エマ生まれる。
一九二〇(大正九年)年 三十五歳
三月、豊多摩監獄から出獄。クロポ、キンの紹介など、ジャーナリズムにカムバック。六日、『労働運動』を六号で廃刊。八月、日本社会主義同盟の発起人に。十月、極東社会主義者会議出席のため上海へ密航。
一九二二(大正十一年)年 三十六歳
一月、アナ・ボル協同の第二次『労働運動』(週刊)を始める。二月、チブスで入院、三月、退院。三女が生まれ、エマと名付ける。六月、第二次『労働運動』を十三号で廃刊する。

十二月、野枝、和田久太郎、近藤憲二と共に、第三次「労働運動」(日刊)を創刊。ポリシエビイキ批判に踏み切る。
アナ・ボル論争の開幕。

一九二二(大正十一)年 三十七歳

二月、八幡製鉄所で記念演説会で演説する。六月、四女ルイズ生まれる。九月、全国労働組合総連合創立大会支援のため大阪へ。十二月、ベルリンで開催される国際アナキスト大会に出席のため、山鹿泰治らの助力で日本を脱出、フランスへ向う。

一九二三(大正十二)年 三十八歳

二月、フランスに着く。国際アナキスト大会は延期となり、五月、パリ郊外サン・ドニのメーデー集会で演説、逮捕され、ラ・サンテ監獄に入れられる。六月、フランスを脱出、七月、帰国。第三次「労働運動」を十五号で廃刊。八月、全国的な自由連合組織の結成企てる。長男ネストル生まれる。九月、関東大震災のどさくさに、伊藤野枝、橘宗一少年と

共に麹町憲兵隊に拘引虐殺される。十二月、三人の合同葬が自由連合派の労働団体、思想団体の共催で行なわれる。当日、右翼による遺骨強奪事件が起こる。

一九二四(大正十三)年 三十九歳

前年末より、和田久太郎、村木源次郎がギロチン社の古田大次郎らと協力し、大杉らの殺害に対する報復を企てる。三月、堀保子死す。九月、和田が震災時の戒厳司令官福田雅太郎を狙撃したが、失敗して逮捕される。続いて、村木、古田らも捕えられる。

アナキズムの英知を結集して日本無政府主義運動への全貌を網羅した初めての画期的な試み!

黒の辞典 第一版

B6判ビニール装・事柄/人名篇

秋山清+大沢正道監修

予約開始一口・千円(二口以上申込の方は送料小社で負担) 来春刊行予定

大杉 栄著書目録 (○自著 ●全集他 *翻訳)

- * 万物の同根一族 (ハワード・ムーア著) 1908有楽社
- 生の闘争 1914・10新潮社
- * 種の起源 (ダーウイン著) 1914・10新潮社
- * 物質非不滅論 (ギュスターブ・ル・ボン著) 1914・10実業之世界社
- 社会的個人主義 1915・10新潮社 11
- 労働運動の哲学 1916・3 東雲堂書店
- * 男女関係の進化 (ルトルノオ著) 1916・11春陽堂
- * 民衆芸術論 (ロマン・ローラン著) 1917・6 阿蘭陀書店
- * 相互扶助論 (クロボトキン著) 1917・10春陽堂
- 獄中記 1919・8 春陽堂
- * 革命家の思出 (クロボトキン著) 1920・2 春陽堂
- * 乞食の名誉 (伊藤野枝と共著) 1920・5 聚英閣
- * クロボトキン研究 1920・11アルス
- 悪戯 (伊藤野枝と共著) 1921・3 アルス)
- * 人間の正体 (ムーア著) (前訳書の増補) 1921・6 三徳社
- 正義を求める心 1921・8 アルス
- 二人の革命家 (伊藤野枝と共著) 1922・6 アルス
- 漫文漫画 (望月桂と共著) 1922・10アルス
- * 昆虫記 (第一巻) (ファールブル著) 1922・10叢文閣
- 無政府主義者の見たロシア革命 1922・10叢文閣
- * 自然科学の話 (ファールブル著) (安成四郎と共訳) 1923・3 アルス
- 生の闘争 1922・7 南天堂出版部
- * 科学の不思議 (ファールブル著) (伊藤野枝と共訳) 1923・8 アルス -
- * 日本脱出記 1923・10アルス
- 自叙伝 1923・11改造社
- 自由の先駆 1924アルス
- 大杉栄全集 (十巻) (安成二郎・近藤憲二編) 1925・6~1926・9 アルス
- 大杉栄随筆集 (安成二郎編) 1927・5 人文会出版部
- 未刊大杉栄遺稿 (安谷寛一編) 1928・1 金星堂
- 叛逆の精神 (近藤憲二編) 1948・6 麦人社
- 正義を求める心 (西田勝編) 1955・4 青木文庫
- 大杉栄全集 (十四巻)(安成二郎・近藤憲二編) <覆刻> 1963・7~1964・4 世界文庫
- 大杉栄全集 (十四巻) (秋山清・大沢正道他編) 1963・12~1965・3 現代思潮社
- 未刊大杉栄遺稿 (安谷寛一編) <覆刻> 1964世界文庫
- 大杉栄 (多田道太郎編) 1969・11中央公論社
- 大杉栄選 (七巻) (秋山清・大沢正道他編) <改装> 1970・7~1971・9 現代思潮社
- 自叙伝・日本脱出記 1971・1 岩波文庫
- 叛逆への情熱 (松田政男編) 1971・3 大和書房

〈書評〉 一相沢尚夫・他 『日本無政府共産党』 (海燕書房刊)

「無政府」と「党」との 乖離の実践軌跡

滝沢 俣一

「金本位制」の崩壊過程の中で、「世界帝国主義の唯一の政策たるブロック結成による統制経済とファシズムは、各国に種々なる形態を持って現われている。」一九三三年の日本帝国主義の「満州強盗戦争によって建設された満州国と日本はブロックを形成した」が、こうしたブロック化により「列強の間の鋭い対立が激化され、今日戦争の危機は日本とドイツにおいて最大である。」すでに各国は防護団の名において人民の武装を準備しているが、このことは「対外戦争を内乱へ転化せしめる第一歩を準備しているに他ならないのだ。」

これが一九三三年一月、「無政府」と「党」という乖離を敢えて結合せんとして誕生した日本無政府共産党(当初は連盟)の情勢認識であった。この危機意識が党結成の媒介となつたことは否めないが、何よりも大杉の「Aの同盟」以降の日本アナキズム運動の史的発展が考慮されねばならないだろう。

本書はこの日本無政府共産党の実践の軌跡である。当時書記長であった相沢尚夫の「日本無政府共産党」と委員長の植村謙問の「黒旗は破れた」の二つの回想、それに資料と

して「日本無政府共産党テーゼ」と「プロレタリアの戦略戦術」が収録されている。この党の生成の意義と限界については連台寺晋の解説に詳しい。以下ここでは本書により党の運動を紹介し、二、三のコメントを加えることにし、書評に替えたい。

相沢の回想が本書の中心をなす。一九三三年、自由連合新聞の編集をしていた相沢の所に二見敏雄が託れた。「いわゆる(純正)アナキストの間でのアナナルコ・サンジカリズムの再検討」をしていた一人である相沢にとつて、既成アナキズムの弱点は「革命団体が無い」ことと「過渡期の問題に対する検討の欠落」であった。この相沢に「俺が金を作ってやる、それで君は運動しろ」という「二見の行動力は魅力だった」(昭和アナキズム運動の軌跡)「行む心やさしき反逆」という。これが「権力主義者に権力を把握させないためにアナキストが社会のヘゲモニーを握らなくてはならぬ。/このためにまず、アナキストの戦闘組織を作る必要がある」、それは当然「中央集権組織を採用すべきだ」という論理を実践した「日本無政府共産党の出発点だった」。こうして党は一九三五年の潰滅までの約二年間

の運動を開始した。

一九三四年一月三〇日にその名称を連盟から正式に党と改称するまでに七回の中央委員会が、そして翌年一〇月二八日まで三〇回の中央執行委員会が開かれ、組織行動計画の検当、各局責任者の選出、綱領と行動綱領の決定、規約の作成等がなされた。またこれらにそつた活動として、党員の拡大、「プランキ主義的なテロリスト集団に終る」ことを防いだという関東地方委員会による労働組合への働きかけ、それに自由連合新聞を使つての情宣活動とパンフレットの発行等が行なわれた。

しかしながらこうした活動も植村の回想が強調している如く、二見による党内秘密結社の性格を持った特務機関の独走に活動力を奪われてしまい、十分な展開がなされることはなかった。「二見の行動力」は裏目と出たのである。特務機関は運動資金の確保を株の投機や郵便局強盗計画等でなさんと試みたが、己れ自身の計画の拙劣さから同志の殺害(麻耶山事件)を引き越し、続く高田農商銀行襲撃に失敗したところで一斉検挙されてしまった。思想的には既に麻耶山事件で敗北したと

は言えようが……

党がこの特務機関の独走を引き起したことはある意味ではその論理の必然であろう。資料「党テーゼ」を読むと、「最高の理想社会としての無政府」を提起しつつも、その過程、すなわち労働者農民の解放「のための手段は、それが適切かつ有力であるならば、そのいづれをも拒否する理由はないし、またしてはならない」と短絡させてしまうのである。まさに連台寺の言う「機能主義」である。このことは党の組織運動論に關しても同様で、レーニンの組織論が、運動に対する社会主義者の本質論的レベルの關係を具体的に固定化したものであるのに対し、アナキストの自己廃棄の機能に期待するのみで、他は「何をなすべし」との踏襲である。

資料「戦略戦術」では始めに引用した情勢認識の次に、「日本の支配的制度的本質」を「貫くものは独占資本主義の著しく進んだ発展と封建制の異常なる強力な諸要素の残存である」と把握、「封建的な身分制の打破は、ただ資本主義的な階級闘争によつてなしうる」以上、来るべき革命は「労働者農民革命」であるとの提起が注目を引く。しかし権力論の

欠落の故に、「現在当面するわれわれの任務はかかる天皇制に向かつて闘争を集中することではなく、むしろ金融資本支配に集中されねばならない」と、当時の天皇制「官僚制統制経済の把握に失敗してしまつたのである。これは後の全員転向の要因でもあろうか。この権力論(自己権力論)の欠落が先の組織運動論の限界でもあつたのである。

ともあれ「レーニン主義とアナキズムを共に超克」せんとした無政府共産党は、確かに「魅力」ある乖離の実践であつた。

(価一五〇〇円・七四年六月発行)

編集後記

発行が、二カ月も遅れた事を、筆者及び読者諸氏にまずお詫び致します。

本号は、伊藤野枝、橘宗一少年らを巻き添えにして虐殺された大杉栄をめぐる、特集を組むに至りました。はや、半世紀を経て全く色褪せない、大杉栄の人となりや、その思想性は、今以て(数々の伝説的エピソードを取り除いた上で)十分に魅力のある、日本の近代史を考える上で忘れてはならない存在であることは言うまでもありませんが、無政府主義の在処は、如何せん、右からも左からも無視され、罵倒されつづけ苦渋にみちた負い目を、いつも背負わされたイデオログ以前の偏見に苛まれてきた史的過程の中に位置付けられているのが現状です。

そこで、一体にむごく扱われてきたアナキズムそのものを思想的に確立した、大正の坂本竜馬と目される大杉栄の原像を、さらに今日の意義を探る姿勢で望みました。

さて、坑夫が山を奪われ、農夫が土を奪われ、さらに漁夫が海を奪取されつつある今日、労働者大衆の生活の場は、過疎地帯から都市型労働者の住む大都市近郊へと移り、過疎地で貴重な労働生産力を、資本投下力のある近代産業・工場産力確保の為に費す月給制の労働者に変質している。つまり、増々権力側の管理化し易い社会

体制堅持の方向へと近づき、身動きのとれない雁字搦めの不可視の縄を張りめぐらせている訳で、個人の生の領域までも社会の政治体制が規定するといった現存する共産主義・社会主義体制と表裏一体の国家形態を助長するものである。

こうした肥大した国家、倒立した胃袋は、いつか民衆の手で倒されるべき対象としてのみ存在価値を有するもので、その時期が早いか遅いかの問題に過ぎない。しかし、だからとて、楽観論は許されない。日毎の精神的努力と蓄積なしに、豚の胃袋を駆逐することは不可能だ。せめて、若者よ、シラケタなあと云い、居直るシラケ世代と遠吠えすることだけは、絶対によめてくれ。

季刊ピエロタ 秋季・第2号
一九七四年十月二十日発行
編集・発行人 北村 博
発行所 吟遊社
東京都新宿区神楽坂2-1-10
☎〇三(二六九)二三三八
印刷スピード・プリンター
* 定価五〇〇円
(年間二千円・送共)

〇ピエロタ冬季号予告―十一月一日刊行予定
総特集 思想家三島由紀夫の姿勢
杜絶な死からはや四年、戦後一早くその予価六〇〇円
虚妄性を見抜き卓越した視点から文学を志
した憂国者三島由紀夫の姿勢を、思想的側
面より追求し、直結する天皇制を止揚せんとする!

審美社 文京区本郷一―二八―二七

高踏派と象徴主義

ピエール・マルチノ/木内孝訳 七八〇円

ボードレールとリルケ

ド・シュガール/近藤晴彦訳(審美叢書) 八五〇円

詩と円環

リルケ ポードレール
エリオット
ジョルジュ・ブーレ/近藤晴彦訳(審美文庫) 四九〇円

現代批評の方法

ジョルジュ・ブーレ/木内孝訳(審美文庫) 三九〇円

真視の人バルザック

アルベール・ベガン/西岡範明訳(審美叢書) 八九〇円

カフカの形象世界

ヴィルヘルム・エムリヒ/喜多尾道冬編(審美文庫) 四九〇円

カフカ対カフカ

ミッシェル・カルージュ/金井裕訳(審美叢書) 七五〇円

カフカ 途方もない闘い

渡辺広士著(審美叢書) 八九〇円

ロブリグリエ論 不在の小説

オルガ・ベルナル/金井裕訳 七九〇円

ベケツト論

リチャード・コー/諏訪部仁訳(審美叢書) 六八〇円

アジア燃ゆ

羽仁五郎 竹中労 対談

八〇〇円

●反日感情のゆくえ 韓国、タイ、インドネシアなど東南アジアに燃え上がる反日感情は必ずや日本のおこりと無反省に痛烈な批判を加え、日本の運命を変えてゆくらう。生々しい事実と、深い洞察がアジアと日本の将来を予見する。

天皇の軍隊

北支派遣軍の証言

熊沢京次郎著 北支方面軍第五九師団の昭和一七年より降伏に至る作戦行動を克明に追跡し、三光作戦による中国侵略の実像を鮮明にする。 一二〇〇円

毛沢東 政治経済学を語る

矢吹晋訳 一九六〇年代初めに書かれた本書は、ソ連モデルを排して、「社会主義への中国の道」がいかにあるべきかを解く。重要文献である。七八〇円

現代評論社

振替(東京)四四一九番
東京・京橋三十一